

「パウロ、テモテを同行者にする」

2024年03月22日

パウロは、デルベにもリストラにも行った。そこに、信者のユダヤ女性の子で、ギリシア人を父親に持つテモテという弟子がいた。彼は、リストラとイコニオンのきょうだいの間で評判の良い人であった。パウロは、このテモテと一緒に連れて行きたかったので、その地方に住むユダヤ人の手前、彼に割礼を施した。父親がギリシア人であることを、皆が知っていたからである。彼らは方々の町を巡回して、エルサレムの使徒と長老たちが決めた規定を手渡し、それを守るように伝えた。こうして、教会は信仰を強められ、日ごとに数を増していった。（使徒16:1～5）

パウロとシラスは、アンティオキア教会から祈りをもって送り出された。シリア州からキリキア州を回って、第一回宣教旅行で行ったデルベ、リストラに行き、そこにある諸教会を訪ね、信者たちを励ました。パウロとバルナバは、教えた信仰を守り、固く立っている信者たちの姿を見て、嬉しく思ったであろう。

リストラにテモテという若者がいた。彼の母親はユダヤ人女性で、父親はギリシア人であった。パウロがテモテに宛てて書いたと言われているⅡテモテ書1章5節には、「あなたが抱いている偽りのない信仰を思い起こしています。その信仰は、まずあなたの祖母ロイスと母エウニケに宿りましたが、それがあなたにも宿っていると、私は確信しています」と書かれている。第一回宣教旅行の時、パウロによって、祖母と母親が信者になり、その後、息子のテモテも信者になったようだ。彼はリストラとイコニオンの教会で評判の良い若者であった。真っ直ぐで、燃える信仰を持っていたのである。パウロはテモテを見て、即座に、有力な手助けをしてくれる若者と見抜いたのである。テモテを宣教旅行に連れて行きたいと思った。テモテはパウロに同行することになるが、その後、パウロはテモテを「我が子」と呼び、テモテはパウロを「父」と慕っている。パウロの激しく、厳しい宣教に、テモテは全力を尽くして支え、仕えている。

「パウロは、このテモテと一緒に連れて行きたかったので、その地方に住むユダヤ人の手前、彼に割礼を施した。父親がギリシア人であることを、皆が知っていたからである」と書かれている。この言葉に納得できない。テモテは父親がギリシア人であったので割礼を受けていなかったことは、あり得ることであろう。しかし、パウロと同行させるために、この地方に住むユダヤ人の手前、割礼を施さなければならない理由はないのではないか。何より、パウロは「キリスト・イエスにあっては、割礼の有無は問題ではなく、愛によって働く信仰こそが大事なのです（ガラテヤ5:6）」と書き、割礼を強要し、かき乱す人は「自ら去勢してしまえばよいのです（ガラテヤ5:12）」とまで書いている。更に、「彼らは方々の町を巡回して、エルサレムの使徒と長老たちが決めた規定を手渡し、それを守るように伝えた」と書いている。エルサレムの使徒会議で決めた、異邦人に律法や割礼を強要しないという規定書を手渡し、これを守るように伝えたのである。それなのに、テモテの割礼を施したというのは甚だしく矛盾する。

パウロがサウロと言われていたファリサイ派の学徒であった時代、彼は頑固なユダヤ教主義者で割礼の宣教者であった。パウロがテモテに割礼を施したということはあるまいこと、若い時のサウロの風聞が、この文脈に紛れ込んだのではないか。パウロとシラスの宣教によって、この地の教会は信仰を強められ、日ごとに信者は増えていった。